

Wakayama University Tourism Update

Semiannual Newsletter of Tourism Education & Practice

WTU Autumn/Winter 2025



Contents – 目次 –

1. Reports – 和歌山大学観光学部生の国際 / 地域活動報告 –
2. Topics – 過去のイベントとニュース –
3. Future Events – 今後のイベント紹介 –

■「第16回関西空港『学生と旅行会社でつくる』海外旅行」グランプリ受賞

鈴木 和さん（学部3年生／岡山県立岡山城東高等学校出身）

岩本 天寧さん（学部3年生／愛媛県立新居浜西高等学校出身）

瀧 千晴さん（学部3年生／徳島県立城南高等学校出身）

佃 めいさん（学部3年生／静岡県立浜松湖南高等学校出身）

西口 真菜美さん（学部3年生／自由学園高等科（東京都）出身）

野上 歩羽さん（学部3年生／大阪女学院高等学校（大阪府）出身）



私たちは、「第16回 関西空港発『学生と旅行会社でつくる』海外旅行企画コンテスト」に参加しました。一次審査通過後は、株式会社エイチ・アイ・エス関西事業部の皆様と協議を重ね、内容の精度を高めながら企画を完成させることで、最終審査会においてグランプリを受賞しました。本コンテストは、ゼミ活動の一環として初めて取り組んだものであり、実践的な学びを得る貴重な機会となりました。

本コンテストに取り組むにあたって、ストレスを解消するための行動全般を指す「コーピング」という概念に着目し、ストレスを感じている若手女性社員をターゲットに、ハワイを目的地とした旅行企画を提案しました。当初は、旅程の詳細

ばかりに目を向けてしまい、コンセプト・ターゲット層・目的地の整合性が不十分で、説得力に欠けるとの指摘を受けました。そのため、情報収集とチームでの話し合いに時間を割き、根拠をもとに3つの要素の整合性を高めることで、企画全体の一貫性を確立することができました。この過程を通じて、コンセプト・ターゲット層・目的地といった提案の土台となる部分の説得力が、聞き手の理解と納得を得る上で極めて重要であることを実感しました。

また、提案のなかに「コーピングノート」というオリジナルのツールを取り入れることで、旅行中に自分に適したストレス解消法を見つけ、帰国した後もストレスに対処できるようになるという、タビナカ・タビアトを意識した独自のプランを展開しました。

特に印象的だったのは、株式会社エイチ・アイ・エス関西事業部の皆様との打ち合わせです。一次審査通過後には、オフィスを複数回訪問し、スライド資料の構成や見やすさ、ターゲット層に対する予算設定の妥当性、旅程における目玉企画の効果など、旅行業のプロフェッショナルの視点から多角的なアドバイスをいただきました。会議の場には緊張感もありましたが、私たちの疑問や提案に対して真摯に応じていただき、非常に有意義で新たな気づきの多い時間となりました。こうした議論を重ねるなかで、より魅力的で実現可能性の高い企画へとブラッシュアップすることができました。

本コンテストを通して、旅行商品を企画・立案することの奥深さ、そのアイデアを実現可能な形にすることの難しさを学びました。現在は、ゼミ活動の一環としてグループに分かれ、データ分析を中心としたコンペティションに取り組んでいます。今回の企画で培った構成員力や発想力を活かし、より説得と実現性の高い提案を行えるよう、今後も一層努力してまいります。

➡ 関連記事： <https://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/news/2025070200059/>

■ タイ・マハーサーラカム大学 観光・ホテルマネジメント学部 研修プログラム

楠 晴華さん（学部3年生／和歌山県立日高高等学校出身）
酒井 優衣さん（学部3年生／開智高等学校（和歌山県）出身）
高橋 舞子さん（学部3年生／札幌日本大学高等学校出身）
田中 あゆ花さん（学部3年生／大阪府立生野高等学校出身）
仁科 友良さん（学部3年生／鹿児島県立甲南高等学校出身）
東本 凪央さん（学部3年生／兵庫県立有馬高等学校出身）
密山 莉生さん（学部3年生／慶進高等学校（山口県）出身）

今回、私たちはPATA和歌山大学学生支部とともにタイのマハーサーラカム大学（以下、MSU）の学生を迎え、和歌山大学での交流プログラムに参加しました。短い期間ではありましたが、異なる文化を持つ学生たちと学び合い、互いの国や地域への理解を深める貴重な機会となりました。

私たちZainal Abidin准教授のゼミ生は、MSUの学生に和歌山市加太の魅力を伝えるためのツアーを企画しました。どのように伝えるか話し合う中で、単に観光スポットを紹介するのではなく、「地域に深く入り込み、その土地の魅力を感じてもらうこと」をテーマに設定しました。タイの観光事情に関する記事を共有したことで、ゼミ全体でタイへの関心が高まり、異なる文化を持つ人に魅力を伝える難しさと面白さを学ぶことができました。最終的に、「Dive into Local Place（地域に深く入り込もう）」というテーマを掲げ、意見を出し合いながら旅行プランを作成しました。模造紙にアイデアをまとめ、情報を調べ、形にしていく過程は簡単ではありませんでしたが、協力して一つのものを作り上げる楽しさと達成感を感じることができました。また、PATA和歌山大学学生支部の皆さんのご協力があったからこそ、私たちだけでは実現できなかった多くのことを行うことができました。準備段階から当日の運営まで、さまざまな場面でサポートしていただき、私たちの活動を大きく支えてくださいました。そのおかげで、より円滑で充実したプログラムにすることができ、参加者全員が学びと達成感を得られる貴重な経験となりました。

初日には、タイの学生にキャンパスツアーを行い、ツアーを通して和歌山大学について知ってもらいました。その後、私たちから日本のマナーや文化に関する簡単な講座を行い、タイの学生からはタイについてのプレゼンテーションをしてもらいました。互いに自国の文化を紹介し合うことで、相互理解を深めることができました。続いて、私たちゼミ生が企画した加太ツアーの概要を説明しました。また、この日は七夕だったため、日本の伝統文化を体験してもらいたいという思いから、全員で浴衣を着て短冊に願い事を書き、大きな笹に吊るしました。大学でのプログラム終了後には、和歌山大学前駅近くのイオンを訪れ、スーパーの見学などを通して日本の日常的な暮らしを実際に体験してもらいました。

二日目は、私たちが立案したプランに沿って加太を訪れました。昼食時には、タイの学生たちが加太の郷土料理や日常生活について店員さんと積極的に会話を交わし、和歌山のローカルな雰囲気に触れる良い機会となりました。

三日目は、前日のツアーの振り返りを行いました。タイの学生から直接フィードバックをもらうことができ、大きな学びとなりました。特に、炎天下の中での徒歩による散策ツアーだったため、目的地をもう少し近くにまとめる必要があったという意見を得ました。また、MSU学生団は大阪・関西万博を訪問する予定だったため、私たちは万博に関するプレゼンテーションを行いました。これまでも英語での発表経験はありましたが、今回は約30分間という長丁場の発表であったため、非常に緊張しました。それでも、「MSUの学生に日本を楽しんでほしい」という思いと、万博への情熱を原動力に、無事やり遂げることができました。さらに、「Critical Tourism Issues B」の授業では、タイ政府観光庁の講師による講義が行われました。日本とタイのつながりや、タイ政府観光庁が日本で市場を展開する際に重視しているポイントについて学ぶ



（次ページへつづく）

ことができました。また、タイの学生が考えた旅行プランの発表では、インターネットだけでは知り得ない、現地の学生ならではの視点からタイの魅力を知ることができ、とても興味深い時間となりました。最後にはクロージングセレモニーが行われ、タイ料理を楽しみながら交流の時間を過ごしました。

このプロジェクトを通して、私たちは改めて加太の魅力や観光の可能性について考えることができました。

観光学部では、このようにさまざまな国の学生と直接交流する機会があります。英語での意思疎通に苦勞する場面もありましたが、「相手に伝えたい」という強い思いがあれば、文化や言語の壁を越えて互いに理解し合い、絆を深めることができる実感しました。こうした気づきは観光学部での学びを通して培われ、今回の MSU 学生団との交流を通じて、その思いはいっそう強まりました。

➡ 関連記事：<https://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/news/2025071000061/>

■「旅が私に教えてくれたこと。」を実施して

PATA 和歌山大学学生支部

宮下 咲良さん（学部3年生／飯田女子高等学校（長野県）出身）



PATA 和歌山大学学生支部では、今年度夏休み企画として「旅が私に教えてくれたこと。」を実施しました。この企画を思いついたきっかけは「自分以外の観光学部生がどんな場所に行き、どんな景色をみてきたのか知りたい」という純粋な好奇心でした。

今日の観光では、SNS 映えや口コミの力が大きく注目されています。しかし一方で、多くの若者は「鍵垢」と呼ばれる非公開アカウントを使い、限られた友人の間で旅の写真や思い出を共有しています。その背景には、気心の知れた仲間だけで思い出を分かち合いたいという安心感や、「見せる」ことよりも「残す」ことを重視する価値観があるのかもしれません。つまり、同じ観光学部に所属していても、「友人の友人」がどこへ行き、何を感じたのかを知る機会は意外と少ないのです。

そこで私は「心の共有」に焦点を当て、学生同士が「映え」ではなく「心に残った旅」を語り合える場をつくりたいと考えました。「あなたの旅のことばが、誰かの旅の扉になる。」これは、この企画に込めたキーワードです。旅先で感じた気づきや疑問を言葉にすることで、他の学生にとっても自分の観光地での行動や価値観を見つめ直すきっかけになればと思い、取り組みました。

参加した学生からは、「旅の中で疑問や気づきを見出すのが意外と難しかった」という声もありました。私自身も、意識して目を向けなければ、観光地で見かけた小さな違和感や課題、たとえば路肩に置き去りにされたゴミのことなどは、美しい景色や楽しい思い出の陰に隠れ、すぐに日常の中で忘れてしまうでしょう。けれども、この「旅の途中で立ち止まった一瞬」を言葉や写真で切り取っておくという過程こそが、観光を学ぶ私たちにとって大切な「学びのタネ」になるのだと思います。

今回寄せられた学生たちの疑問や気づきを通して、同じ場所を訪れても、人によって見える景色や感じるものがこんなにも異なるのかと驚かされました。例えば神社の落書きから感じた「昔の人が残した落書きは文化的資源になりうるか」という投げかけは、物事の善悪や意味は、物事の背景や時代、それを捉えた人の価値観・バックボーンによって見え方が違うということを改めて実感しました。

けれども、見る人によって違う価値や魅力が見えてくることこそが、旅の醍醐味だと思います。同じ風景の中に、それぞれの「まなざし」があり、その多様さこそが地域の豊かさを映し出しているのではないのでしょうか。今回は学部生・大学院生を対象に実施しましたが、今後はその輪をさらに広げ、海外の学生支部との交流や連携のきっかけにも繋げていきたいと考えています。旅を語ることで生まれる小さな気づきが、国や地域を越えて共有される。そんな新しい「観光の学びのかたち」を、これからも探究していきます。

■ 地域の魅力を活かした商品開発

～地域連携プログラム（LPP）：フルーツドレッシングのP R企画・立案（和歌山県紀の川市）

上原 ひかりさん（学部2年生／鎮西学院高等学校（長崎県）出身）

私たち紀の川市 LPP は、和歌山県紀の川市粉河（こかわ）地区をフィールドとして地域の魅力を活かした商品開発を行っています。フルーツ王国として知られる紀の川市では「あら川の桃」を始めとして、みかんやはっさく、いちじくなどで全国有数の生産量を誇り、市の農業生産額の約7割を果物が占めています。私たちはこれらの豊富な紀の川市産のフルーツを使用して発酵ドレッシングの開発を行いました。

このドレッシング開発においては、マーケティングからドレッシングの味選び、ラベルのデザイン制作までを、企業と協力して1から自分たちの手で行いました。また、紀の川市の協力のもと様々なイベントに商品を出展し、多くの方にこのドレッシングを知ってもらう機会も作っています。現在はテスト販売期間中ですが、12月ごろにオンラインや店舗にて本格的に販売を行う予定です。

私たちの活動の背景には、紀の川市という街をもっと多くの人に知ってもらいたいという思いがあります。現在の紀の川市は、少子高齢化と人口減少が進み、それに伴う農業従事者の高齢化や担い手不足が深刻な問題となっています。耕作放棄地の増加も問題となっており、このままでは美しい自然や伝統的な果物産業が失われてしまう可能性すらあります。私たちは商品開発を通じて、こうした地域課題を少しでも解決したいと考えています。開発した商品が紀の川市を知る小さなきっかけとなり、「この街に行ってみたい」「関わってみたい」と思う人が増えることが私たちの目標です。販売にあたっては、紀の川市産であることや紀の川市の人々と協力して作ったことを伝えることで、消費者に少しでも紀の川市という言葉を目にしてもらえよう努めています。

最後に、私はこの LPP の活動を通して初めて紀の川市や和歌山県に触れました。最初は知らない土地に戸惑いましたが、紀の川市を訪れる中で出会った人々のあたたかさや地域の豊かさに触れ、今では第二の故郷のような場所になっています。私たちの活動はまだ道半ばですが、地域の魅力を商品として多くの人に伝え、少しでも紀の川市を盛り上げていけたらと思います。これからも紀の川市 LPP を通して、この街のためにできることを考えていきたいと思っています。



■ SNS を用いた観光誘客～多方面のアプローチへの挑戦～

～地域連携プログラム（LPP）：美浜町の魅力発信と観光誘客（和歌山県日高郡美浜町）

佐々木 ひなのさん（学部2年生／開智高等学校（和歌山県）出身）

私たち美浜町 LPP は、1回生12人、2回生3人で構成されており、SNS等での情報発信を通して美浜町の魅力を多くの方に知ってもらい、観光客として訪れてもらうことを目指して活動しています。

美浜町は和歌山県で2番目に面積の小さい町でありながら、明治時代から昭和にかけて多くのカナダ移民を輩出したアメリカ村や、日本の白砂青松100選に選定されている煙樹ヶ浜の松林など、歴史や自然の豊かな町です。また体験型アクティビティや飲食店等も充実しており、そこで暮らす住民の方々も非常に魅力的な方ばかりです。しかしその魅力が和歌山県外にはあまり知られておらず、誘客に繋がっていないという点が課題であると感じています。

そこで私たちは美浜町の魅力を県内外に広く発信するために、ショート動画の作成に取り組んでいます。メンバーそれぞれが興味を持ったテーマに沿って班を



（次ページへつづく）



作り、歴史や食べ物、アクティビティなど、それぞれのジャンルに分かれて取材や撮影を行っています。

また動画だけでなく写真による PR にも挑戦し、美浜町の魅力と合わせて LPP の活動自体にも興味を持ってもらえるよう試行錯誤を重ねています。また縦型動画に加えて横型動画の作成も計画しており、より幅広い世代や層に発信できるよう心掛けています。

今後は実際に美浜町を訪れる観光客に向けてモデルコースの作成にも挑戦し、旅行プランニングの手助けとなるような情報発信も行っていきたいと考えています。

さらに今年 1 年間の活動の集大成として 12 月頃に現地でのお披露目会の開催を目指しています。これまで作成してきた動画や成果を住民の方々に直接見てもらい、交流できるような場にしたいと考えています。

今年度が 1 年目の LPP ということもあり至らない点も多くありますが、メンバー全員が試行錯誤を重ねながら取り組んでいます。今後もより魅力的な発信ができるよう、ブラッシュアップしながら活動を続けていきたいです。

これからさらに盛り上がっていく美浜町 LPP の活動を通して、美浜町の魅力に触れ、ぜひ一度訪れてみてください。美浜町 LPP のInstagram アカウント (@mihama_w) のフォローもよろしくお願いします！

■ 旅がもたらす価値 - スペイン GIP を終えて - Global Intensive Project (GIP) - Global Learning Advanced : ～ピレネー地域における観光 (スペイン)～

中谷 葉南さん (学部 3 年生 / 大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎出身)



皆さんにとって旅をする目的とは何でしょうか。旅の効用とはどのようなものでしょうか。気分がスッキリすること、知らない場所を訪れて好奇心が満たされること、あるいは旅の記憶を思い出すことで後々に心が救われることなど、人によってさまざまだと思います。そしてそれらの経験があなたの心を少なからず支えているのだと思います。

スペイン GIP は観光文化学習を主とするプログラムであり、観光や町おこしに従事する人と関わりながら、観光の現状を学びます。修道院や教会などの宗教施設、ホテルや観光局を訪問し、観光業に携わる多くの方々と交流しました。現地で日本人のガイドの方にお世話になったのですが、その方は大学時代スペイン語を専攻し、卒業後単身でスペインに渡り、知らない土地に一人で投げ出された経験によって一度、自己のアイデンティティが崩壊したとおっしゃっていました。しかしその経験は自分を見つめ直す大きなきっかけになったそうです。現地で出会った観光業に携わる方々は皆、いろいろ大変なことはあるけれど人との出会いを心から楽しんでいるという感じがしました。人に喜んでもらうことを自分自身の喜びに繋げていました。

また、スペインの社会そのものにも深い印象を受けました。2005 年に同性婚が法的に認められるなど、ジェンダーや生き方に対してとてもオープンな国です。「結婚してもしなくてもいい」「自分の人生は自分で選ぶ」という価値観が広く受け入れられており、自分にも他人にも寛容な感じがしました。多様な文化圏の人々が共存していることも、そうした考え方を育てているのだと思います。異なる文化や価値観を持つのが当たり前だからこそ、他者を許すためにも、みんないい意味でそれなりに適当で「自分は自分、他人は他人」として互いを尊重する。違いを恐れず、許容しながら、自分のやりたいことに真剣に向き合う人々の姿がとても印象的でした。

スペイン GIP を通して旅は外の世界への気づきであると同時に、内なる自分への気づきでもあるとあらためて感じました。旅は人を幸福にし得ると思います。旅で心を揺さぶる光景に出会って、あなたの何かが書き変わる瞬間があると思います。そうやって少しずつ自分の捉え方の変化に気づいて自分の中の絶望から乗り越えられる人が増えてほしいと思います。旅の記憶は、旅の後心の中に残り、ふとしたときにあなたを励ましてくれることもあります。そうした内面的な変化こそ、旅の大きな効用なのかもしれません。そうやって自分の知らない場所、景色、価値観に出会うことで何かが変化する、少しでも絶望感を捨て、希望を持っている人が増えればよいと願います。



➔ 関連記事： ニュースレター WTU 2025SS (2025 年 4 月発行) 10 ページ
https://www.wakayama-u.ac.jp/_files/00733274/WTU_2025SSs.pdf

■ 私がイギリスの大学で学んだこと

西嶋 大喜さん (学部 4 年生／和歌山県立田辺高等学校出身)

私は 2024 年 9 月から 2025 年の 5 月まで、イギリスの University of Central Lancashire (UCLan) への交換留学に参加しました。和歌山大学からは語学留学と学部留学の 2 種類がありますが、私は国際ビジネスの現場や文化について学ぶため、学部留学の International Business Communication (IBC) に編入しました。

留学を決めた最大の理由は異文化への好奇心です。特にアルバイトや課外活動で多くの外国人と関わってきましたが、彼らはどのような場所から来ているのか、その国の文化は日本と何が同じで何が違うのか、私自身が「外国人」になれば異国をどのように感じるのかを知りたいと思いました。

UCLan では週に 4 つの講義を受講していました。大きく分けて英語での研究能力を高める講義、国際ビジネスのセオリーを学ぶ講義、文化やコミュニケーション方法の違いについて学ぶ講義があり、修了後の進路を意識したカリキュラムが設定されていました。また、このコースは留学生のみに開講されており、特定の国籍のみでなく多国籍な環境でのディスカッションや協働の経験を積むことができました。また、IBC は語学留学とは異なり、すべての講義に合格すると正規の大学プログラムとして修了が認められるため、学びの大きなモチベーションになりました。

とはいえ、UCLan の講義は和歌山大学よりもかなりハードでした。授業そのものは観光学部の Global Program (GP) での経験もあり理解できたのですが、それまで GP でこなしてきたものよりも大量の課題が課され、試験前は朝から夜遅くまで図書館に籠ることも珍しくありませんでした。ストレスを感じる環境ではありましたが、同じく学習に取り組むクラスメイトと仲良くなったり、学習のモチベーションを保つために生活習慣や物事の考え方を見直すことができたり、並大抵のことでは折れないくらいに内面が成長したように感じます。

授業外ではフラットの友人と料理会をしたり、society (サークルのようなもの) でピクニックをしたりしていました。最初は英語で話しかけることに緊張していましたが、共通の話題が見つかると思ったよりも友達が作りやすかったのも、それからは言語力に縛られず外国の友人を作ることに抵抗がなくなりました。

また、他の留学生との交流も刺激的でした。同じ留学生ではありますがそれぞれ専門分野や将来像、背景が多様であり、それぞれが留学経験を違う形で捉えていました。自分とは違うマインドや習慣を取り入れる機会になり、帰国後も続けているものがたくさんあります。

最後に、日本にいるときとは全く異なる環境だからこそ多くの新しいものに出会うことができたし、自分の内面を鍛えることができたのだと思います。今後もこの経験とチャレンジ精神を大切に励んでいきます。



Topics –過去のイベントとニュース–

■「2025 年度 LPP 参加学生交流会」を実施しました



2025 年 10 月 20 日（月）、21 日（火）の二日間にわたり、2025 年度の地域連携プログラム（LPP）に参加している学生が集まり、LPP での学びの共有と発展を目的とした「2025 年度 LPP 参加学生交流会」を実施しました。

今年度の交流会では、LPP に関する 5 つのテーマ（メンバー同士の協力・グループ運営／地域との関わり方／情報発信・広報／自分の成長と学び／授業と LPP のつながり）について、各プログラムのリーダーがファシリテーターとなり、ワールドカフェ形式でのグループディスカッションを行いました。

前半の活動を振り返るとともに、所属しているプログラム以外の活動を知り、互いに意見を交わすことで得られた知見をもとに、後半の活動がより良いものになることを期待しています。

Future Events –今後のイベント紹介–

■「2025 年度 和歌山大学『観光・地域づくり』講座 @Zoom」のご案内



本公開講座では、2008 年度「観光カリスマ講座」として開講して以来、観光地や観光ビジネスにおいて高く評価されているキーパーソンを講師に招へいしています。各方面で活躍されている方々のユニークな着眼点やリーダーシップを発揮しての事業の推進、異業種を巻き込んでのコンセンサスの形成方法など、さまざまな観点からの実践事例を拝聴するなかで、和歌山県をはじめとする地域の観光振興とまちづくりの方向性を探ります。

2025 年度も Zoom のウェビナー機能を利用したオンライン公開講座（ライブ配信）として実施しています。

既に第 1 回は終了しましたが、第 2 回以降、各回開始 1 時間前まで申し込みを受け付けています（ただし、定員に達し次第受付を終了します）。

皆さまの聴講をお待ちしております。

➡ プログラムや参加申込方法などは、観光学部 HP 掲載ニュース記事をご覧ください。
<https://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/news/2025090400019/>

編集・発行

（2025 年 10 月発行）

和歌山大学 観光学部 観光実践教育サポートオフィス

〒640-8510 和歌山市栄谷 930 和歌山大学西 4 号館 K216 室、K116 室

TEL 073-457-8553 / E-mail tourism-er@ml.wakayama-u.ac.jp / URL <https://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/>

* 本誌は Web ページからも閲覧できます→<https://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/fuzoku/tourism-education-research/wtu.html>

